

研究ノート

母娘関係の臨床心理学的研究の展開Ⅱ

— 主にフェミニズム心理学の観点から —

高 石 浩 一

0. はじめに

母娘関係については多くの論者が議論してきたが、臨床心理学の領域で大きな主題となってきた背景に、フェミニズム心理学の発展があると考えられる。そこで本論では、Beauvoir (1949/2001) による「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という宣言に始まるフェミニズム心理学の発展と展開を概観し、特定の主題やテーマの展開が女性の意識の成長と成熟を跡づけているという Jung 心理学的な方法論を用いて、筆者なりの女性の「発達段階」論を展開してみたい。併せてそれが昨今の臨床心理学的な観点から見た母娘関係に、どのような影響を及ぼしているかを検討してみたい。

1. 女の語る母娘物語（フェミニズム物語の系譜）

これまで女性の発達段階について言及してきた Jung、Neumann、織田、横山、河合といった研究者たちの多くは、Jung を筆頭としてもっぱら分析心理学に依拠する分析家たちである。もともと、その理論に両性具有的な発想¹⁾を内包していた分析心理学派の分析家たちは、20 世紀後半のフェミニズムの台頭と並行してその思考を深め発展させてきた。

しかしそれに先行する Freud および精神分析は、19 世紀末のウィーンの家父長的伝統を

踏まえた思想であるとされ、とりわけエディプス・コンプレックスと男根羨望を理論の根幹に据えたその男根主義的発想は、女性の権利擁護を唱えるフェミニズムにとって、激しい攻撃の対象となった。さらにそのことをいかに克服して自らの存在基盤を理論化するかは、自己矛盾をはらむ精神分析家を名乗る女性たちにとって、解決すべき喫緊の課題であった。例えば Mitchell (1974/77) は「大部分の女性運動は、Freud を敵とみなしている…精神分析は、ブルジョア的、家父長的な現状を正当化するものであり、Freud 自身が身をもって、それらの性質を例証していると考えられている」としながらも、彼女にとって精神分析は、「家父長制社会のための推薦状ではなく、家父長制社会を分析するもの」であり、「女の抑圧を理解し、それをはねのけようとするに関心を持つならば、それを無視することは許されない」として、Freud を批判しつつも擁護するという両価的な態度を示している。

ここでまずはフェミニズムを定義しておきたい。広辞苑では「女性の社会的・政治的・法律的・性的な自己決定権を主張し、性差別からの解放と両性の平等とを目指す思想・運動。女性解放思想。女権拡張論」²⁾と定義されている。ホーン川嶋瑳子 (2000) は、「フェミニズムは、抽象的レベルでは、(1) 男女間には非対等な力関係があるという認識から出発して、その原因、プロセス、維持のメカニズムを分析し、(2) 社

会的、経済的、政治的、文化的、心理的変革をめざす、(3) 理論と運動である」としている。

こうしたフェミニズムの思想や運動は、まず冒頭に掲げた Beauvoir によって先鞭をつけられ、第一波フェミニズム運動として女性の参政権運動が展開された。これは長期にわたる政治的な活動によって、多くの国で実現されていたが、母娘関係との関連で重要なフェミニズム運動の展開は、1960 年代後半に始まったとされる第二波フェミニズム運動の流れである。信田 (2017) によれば、「1960 年代末から欧米で生まれた第二波フェミニズムに影響を受けた女性たちは、女性の自立や母娘の関係がどこにも位置づけられていない Freud 理論を批判し、女性による女性の自立のための理論構築をしようとした」という。

近代フェミニズム思想は、水田 (1996) によれば、「自立した個人を志向して、人権と男女同権を獲得しようとする」極と、「産む性として生命の再生産を担い、子どもの成長に深くかわかる母性、男性とはく区別される性」としての女性の権利と擁護を主張する」二つの極を持ちながら展開してきた。その中で、「女性や母性という見直しと修正が行われるのは、とりわけ 1970 年代以降のフェミニズムによってである」としている。Freud 派の精神分析を意識しつつ、とりわけ母娘関係に焦点づけながら、自らを問い、また娘として、母として語ることを始めたこれらのフェミニズムの論客たちについて、少し遡って概観してみたい。

1-1. 精神分析における女性の発達論

1884 年生まれの Deutsch, H. は、1885 年生まれの Horney, K. とほぼ同世代である。これら二人の女性精神分析家は、Freud の女性の発達論に影響を与え、またそれぞれ独自の女性の心理的発達の観点を打ち出した。Deutsch は自ら

を生涯フェミニストであったと 1972 年のインタビューで答えてはいるが、全体としては男根主義的な Freud の女性についての理論を支持した、とされている (Wright ; 1992)。例えば、Deutsch は「女性の精神生活に見られる、女性的な受動的マゾヒズム的傾向」の原因に「女性の解剖学的宿命的」を見ている。それに対して Horney は、「女性のマゾヒズムの問題は、女性の解剖学的一生理学的・一心理学的特徴に内在する要因にのみ関連しているのではない。マゾヒスティックな女性がとくに育つ文化複合体や社会組織によって、重大な影響を受けるものとして考察されねばならない」としている (Horney ; 1982, 290)。つまり女性は生まれつきマゾヒズム的だとする Deutsch に対し、社会が従属的役割を女性に植えつけていると Horney は主張しているのである。「事実、われわれの文化では、解剖学的一生理的な女性の特徴やその心理的影響力が一切なくとも、ただ文化的影響だけで、女性は全てある程度マゾヒズム的にならざるを得ない」(前掲書 288) と Horney は言う。そうして「男根衝動が生来サディズム的な色合いをもっていると仮定する理由は何らないし、また男性的=サディズム的、女性的=マゾヒズム的と毎度特別の理由なく言うのは許されない」と強調している (前掲書 83)。Freud はペニス羨望を唱えるが、男の子には乳房羨望があり、また男性が創造的な仕事に駆り立てられるのは、子どもを産む母性へのナルシズム的な補償だと断じるのである (前掲書 86)。

男女の解剖学的な差異に基づく初期の理論から、社会文化的な方向へと視点を移した Horney は、フェミニズム的なテーマには興味を示さなかったとされる (Wright ; 1992) が、女性の立場から Freud の男根主義的、家父長的発想に異を唱えた初期の研究者の一人と言っ

てよいと思われる。

1-2. 母娘関係に関する精神分析的考察

しかし前述のように、本格的にフェミニズムの立場から、Freudや精神分析を読み直し、あるいはその発展としてとりわけ母娘関係のテーマを提起したのは1960年代後半から1970年代以降のフェミニスト研究者たちであり、それは例えば上述のイギリスのMitchell (1974/1977)、アメリカのGallop (1982/2000)、Chodorow (1978/1981)、そしてフランスのIrigaray (1977/1987)、Kristeva (1991)、といった論客たちである。

まずMitchell (1974/1977) は、通俗的なFreud理解とそれに基づくFreudへの誤解を糾弾し、Freudの正確な読み直しを提唱する。「私 (Mitchell) が言いたいのは、FreudではないFreudを排斥しているうちに、われわれが今まで持っていた女性心理理解の重要な可能性を失ってしまったということ、および精神分析を誤認して拒否するうちに、抑圧のイデオロギー的なまた心理的な面を理解する重要な科学が捨てられてしまったということ」である、とMitchellは主張する。BeauvoirもまたJungやAdlerの概念 (エレクトラ・コンプレックスや「集団的無意識」、「男性的抗議」など) をFreudの概念と誤解し、「少女に自分の現実的社会的劣等性を、少年に自分の優越性をわきまえさせるのは家父長制文化である」と見なし、「フロイトは、つねに男のモデルを使って、第二の性という身分を承認したことで、有罪である」と断罪するBeauvoirに対して、Mitchellは精神分析があくまで「探求の科学的方法」であることを強調してそれを擁護している。Mitchellはまた、「女らしさ」を論じる中で、Freudにとって男女の補完性や並行性は問題外であり、エディプス・コンプレックスの状況の

中で、女性は男の世界に参入するので、男女の対称性はある得ず、「法 (父) への服従は、それと反対物—非常に愛らしく非合理的なもの—に自分を仕立て上げることにならなければならない」(前掲書 262) としている。そうして母娘関係においては以下のように述べ、精神分析的な観点から分析することの有効性を強調している。

「彼女 (女) は (母への執着とは正反対の) 母とのエディプス的同一視を固めなくてはならない。そして攻撃と支配の資質を引き受ける代わりに、愛と和解の技を身につける。文化の法の相続人ではないので、彼女の任務は、自然の家族と思われるものの円環の中で人類が再生産するように気を配ることである。家族は、もちろん、女と同様に『自然』ではない。しかし、法の中におけるその本分は『自然』の機能を受け継ぐことである。…これが家父長制文化における女の地位である」(前掲書 263)。

Mitchell (1974/1977) はLacanとマルクス主義を援用して、(資本主義に代わる社会主義の誕生が階級闘争を通じた歴史的必然であるように)「家父長制」に代わる「新しい構造」の誕生を女性解放運動の任務であるとし、それは「子宮外ベビー」のような技術革新や、政治経済的な社会的不平等の克服といった方法によっては不十分で、「家父長制に対する特殊の闘争—文化革命—が不可欠である」と断じている。しかしながらそうした「新しい構造」は、母系社会や原始女家父長制の用語で思い描くことは不可能で、(家父長制の再生産という) 人間の無意識に変化をもたらすような根本的なことを実現すべく、「自分たちを組織しなければならない」としている。

こうしたMitchellの主張は、しかしながら諸刃の剣である、とGallop (1982/2000) は言う。「もし自己というものが自らを形成し始めるの

が、父権制文化の中であるとするなら、父権制文化は実態としてすでに主体の中に存在するということになる。したがって父権制文化を打倒するための行動を起こす（どんな）人間の中にも、必ず父権制文化が内在していることになる。とすれば、誰がどのようにして父権制文化を打倒できるのだろうか？」（前掲書 38）と問いかける。そうして、「戦わなければならない相手は、父権制文化ではない。＜死せる父の法＞を生物学主義に単純化して、現実には『生きている男』の法にしようとするものたちと戦わなければならないのである。この『生きている男』の策略に引っかからないようにするためには、(Lacan の) 言語理論を取り入れることで本来の先鋭性を取り戻した精神分析論を、フェミニズムは受け入れなければならない」としている。

ここで＜死せる父の法＞を父権制文化、「生きている男」を父権制文化を維持し続けようとする社会に生きる男性たち、と単純に読み解けば、Gallop の主張は Lacan の言語理論に基づいて、父権制文化を維持しようとする男たちに対抗する武器をフェミニズムは持たねばならない、という主張に聞える。しかしながら、Gallop の主張はそれほど単純ではない。彼女は Lacan の言語理論そのもののの中に父権制文化を見、それ自体が再び批判の対象となりうる可能性を見ているからである。彼女の理論は、後述する Irigaray、Kristeva（より根源的には上述のように Lacan）といったフランスの精神分析的フェミニズムの流れの上に依拠しているので、まずはそちらを検討してみたい。

Lacan の弟子として出発し、のちに精神分析から「追放された」Irigaray (1977/1987) は、精神分析の家父長的性質を看破し、母に負っているものを認識すべきだと『検視鏡』において主張した。そこでは精神分析において、いや西欧思想全般において、存在さえ不確かにされた

「母」が、実は「男」の自我形成、思想形成に不可欠な「鏡」の役割を果たしていた、と彼女は主張する。もっとも彼女は、それを論理的概念的な明確さをもって描いたわけではない。

Irigaray (1977/1987) の「質問録」は、『検視鏡』に対する質問集であるが、そこで彼女は「女性的なものが概念のかたちで表現しようと主張すれば、またもや＜男性的＞表象体系にとられるままになります」と述べ、「女性的に語る」ことにこだわる。「女性的に語る」とヒステリックに語ることは？」という挑発的な問いへの答えの中で彼女は、「ヒステリーとは、語らないものを保持する特権的な場、しかし＜潜伏した＞まま、＜苦しみ＞に満ちたまま、それを保持する場のこと」としたうえで、「＜女性的に語る＞の問題は、まさに、一現在のところ徴候とか病理とかのかたちでしか探知できないような一欲望のこの身振りやこの言葉と、狭義の言語をも含めた言語との間に可能な連続性を見出すことでしょう」という。「ヒステリーは女性的な神経症ですか？」という問いに対しては、「今日では特権的に…＜女性的なもの＞の＜苦しみ＞ではないですか。とりわけ、＜女性的なもの＞と母への欲望、女一母への欲望との連結不可能な関係からくる＜苦しみ＞ではないですか。」と述べている。

ここで提起される母娘関係について、Irigaray は次のように述べる。「私が母との関係と言うとき、この家父長制文化の中では、娘は母との関係を全く解決できないことを言いたいのです。…家族が存在しなくなっても、女性が女性を生むことに変わりはないでしょう。ところが、社会文化機能の現行論理の中では、娘が母に対して自己を位置づけるどんな可能性もないのです。なぜなら、厳密に言って、母娘はひとりでもふたりでもなく、固有の名も意味も性も持たず、たがいに＜自己識別＞できません

から。…母とは必ずしも家族の母ではありません。母とは娘を生み養い育てる女です。これらふたりの女性の関係をどう連結して解決するか。ここに、《たとえば》、文化の他の《統辞》、文化の他の《文法》の必要性が出てくるのです」(前掲書 186-187)。

Irigaray は、こうした「母」との複雑な関係をはらみながら、「女」「女性的なもの」の存在証明の必要性を高唱している。それは「欲望される性」から「欲望する性」への移行であり、男たちの「母」、「処女」、「売春婦」(前掲書 243)ではなく、あるいは「私有財産」「公有財産」(前掲書 265)でもない何者かになることである。

Irigaray の母娘関係についてのこうした言説は、あくまで「娘」としての声である、と先述の Gallop (1982/2000) は述べ、「母」として語る Kristeva (1991) との対比を行っている(前掲書 254)。Kristeva は「愛という異端の倫理」(1991)の中で赤裸々に「母であること」の体験を詩的に(上段で)語りながら、(下段では)「処女にして母なるもの」であるマリアについて、論理的学術的に検証している。こうした記述の仕方について、Gallop は「母の位置から語るということ自体、欺瞞的」であり、同時に「論理的に語るということ、父の象徴の秩序に基づいて語るということも、欺瞞的」であるが、Kristeva はそうした「永遠に二つのことを代わる代わる行うこと」を成功させたとみている(前掲書 279)。しかしながらそこ(母のいるべき場所)には誰もいない。「ようするに、Kristeva は、そこから語ることは欺瞞的なことだと主張しながら、それを承知でそこから語っているわけで、その結果、そのことの欺瞞性を暴露している」ということになる。一方 Irigaray は、「そこから語ることを拒否し、その持つ力を嫌悪するのだが、その結果、母は

ファルス的なものとなる」(前掲書 256)。要するに、両者ともに「母の不在」、より積極的に言うなら「父の法」によって亡きものにされた「母殺し」を問題にしているということになる。しかしながら、Gallop の主張はもう少し先にある。「精神分析が常に犯す過ちの一つは、すべてを家族というパラダイムに還元してしまうということ」(前掲書 314)である、というのが彼女の主張である。「精神分析が『想像界』から抜け出すためには、『象徴界』に属するものを取り入れなければならない…社会的階級を示す言葉を取り入れなければならないのである」(前掲書 323)。

これら Lacan の精神分析に(否定的にしろ肯定的にしろ)影響を受け、女性が「書くこと」=ファルス中心文化の中で「言語」を用いて自らの作品を生み出すこと、にこだわっていた一群のフランス系精神分析家たち、活動家たちは「エクリチュール・フェミニン」と命名され、とりわけ思想的に大きな影響をフェミニズムに与えていた(Kristeva 自身はエクリチュール・フェミニンに否定的であったとされるが、母の欲望を強調し、実験的な著述活動を行ったという意味では、その一人であることは免れ得ないと思われる)。その記述の仕方は、上述の Irigaray や Kristeva に見られるように「遊び、断裂、過剰、断絶、文法上の転覆、シンタクス(統語法)の転覆、曖昧さ、暗喩的言語や神話」によって特徴づけられ、反権威主義的で、問題提起と揺らぎを引き起こすような方法が取られた(Wright; 2002)。

彼女たちにとっては、男根的、父権的社会では看過されてきた「母性」と「身体」が大きなテーマであり、「自分たちはどこから来てどこへ行くのか」すなわち母娘関係を扱うことが必然的要請でもあった。そこではまず上述のように父権的社会において(系譜学上歴史的にも、

心理学上個体発生的にも）抹殺され無視された母をよみがえらせる試みとして、ファリック・マザー（恐るべき権威を備えた母）という両性具有のイメージ³⁾が注目されるが、そうした母をよみがえらせつつも、それを克服すべき、しかしながら決して絶縁できない対象として、女性として自らのアイデンティティを確立すること、が焦眉の課題とされた。要するに「母として語ること」と、(娘として)「母について語ること」の対立構造から、そのどちらでもある女性のアイデンティティの構築が、模索されるようになったのである⁴⁾。

ここで興味深いことに、Kristeva (1991) の紹介者の一人である棚沢 (1996) は、「Kristeva も Irigaray も、子どもの立場はとることはしても、母の立場で理論を作ることは、少なくともこれまではしてこなかった」と述べている。上述の「愛という異端の倫理」についても、「妊娠や出産体験についての散文詩めいたものもあり、母が主体として語ることを試みていたようなのですが、それがそのあと発展して理論化されたりということはありません」(『母と娘のフェミニズム』216) と断じている。そうして、これら現代フランス思想の研究の上に立って、「母について＜母自身＞が語ったらどうなるかを、少し考えてみたい」として、「種の問題」と「労働」の観点を強調している。前者は妊娠、中絶に関する母の自己決定権に関わる問題であり、(母胎と胎児について)「どこまでを自己の権利とするかの決定」であるとしている⁵⁾。後者は「母であることを＜労働＞ととらえたらどうなるか」という問いたてであり、母親業を「世話労働」として見直すことを提唱している(前掲書 219)。そこで次に「労働」の観点から母親を論じた Chodorow を取り上げてみたい。

1-3. 「母親業」という視点

精神分析家である Chodorow (1978/1981) は、母親業が単に役割訓練や役割への同一化、強制によるものではなく、きわめて心理的な基盤を持つものでもあると考えている。「私たちが知っているような形でのおんなの役割は、歴史的産物である。西欧における産業資本主義の発達の結果、家族内でのおんなの役割はますます、個人的な関係および心理的安定性に関わるものになっている」(『母親業の再生産』48)。彼女は Kline, M. 以降の対象関係論(バリント、フェアバーン、ウィニコット、ガントリップなど)に基づいて、「初期の母子関係が、男女を問わず子どものなかに、親たらんとする土台を築き、おんなの母親業を当然とする考えを植えつける」(前掲書 10) と見なしている。そうして「おんなは母親として、母親としての能力や母親たらんとする願望をもつ娘をつくりあげている。これらの能力や要求は着実に積み重ねられ、母-娘関係そのものになり、やがて次世代へと受け継がれていく」(前掲書 9) としている。とりわけ前エディプス期の母子関係についての男女児間の不均衡(女兒は男児よりも長期にわたって共生的であり、また母親の幻想中の自己となるという意味で同一化が進むが、男児は早い段階で母親を他者として体験し、自我境界を確立する)は、「ごく幼い時に体験する社会関係が、心理面の成長とパーソナリティ形成を決定づける」(前掲書 79) とする対象関係論から見ると、母親業の再生産のみならず、性別役割分業を支える強い基盤となりうる。というのも女兒の場合、「発達の期間中ずっと、おんなは内在化された第一次的母子関係の上に母親との同一化を重層的に作り続け」るが、男児は早々にこうした前エディプス的母子関係を離脱し、エディプス関係へと移行することができるからである。こうした体験の「ごく初期の内化は言

語以前のものであって、おおむね身体的方法で体験される」(前掲書 76) ため、それらは大人になった息子や娘たちの対人関係や日常生活に潜在的な影響を及ぼし続ける、という。母親業のための関係基盤は、「おんなに広げられ、おとこには禁じられて、おとこは自らを他者からより分離したより別個の存在として経験する」ようになり、さらにこうした関係能力の抑制により「おとこは、疎外された労働の感情否定の世界に参与する準備をさせる」(前掲書 312-3) ことになる。こうして「おんなが母親業をすることは、性体系の基本的な編成上の特徴である。つまりそれは労働の男女分業の基本であり、おんなの能力や資質についてのイデオロギーのみならず、男性支配のイデオロギーや心理をつくり出す。その上なおんなは妻として母親として、男性労働者の日々のかつまた世代的な再生産にも心理的にも貢献し、かくして資本主義的生産の再生産に貢献する」ということになる。

Chodorow は、さらにこう宣言している。「私は平等な親業によって、男女ともに各々がもっている積極的な能力を伸ばし、一方で現今の傾向がもっている極度の破壊性がなくなることを期待している。」「現在の親業編成を排して、男女両方が責任をもつ親業体制を採ることは、社会的に目覚ましい前進であろう。」(前掲書 327-8) ⁶⁾ Chodorow のこうした所論は、あまりにも決定論的で、個々の女性間の差異を考慮していないという批判もある (Wright 255) が、母親業の心理社会的基盤を明らかにするとともに、それを「労働」としてとらえることによって、「親業」への道筋をつけたこと、つまり男女双方の協力のもとに子育てを行うという方向性を明示したことは、大きな貢献と言えよう。

1960 年代後半に始まるこうした第二波フェミニズムの流れは、「個人的なことは政治的なこと」というスローガンのもとで展開した。す

なわち「家族」や「恋愛」など、従来は「私的」なものと見なされていたものを、社会構造に埋め込まれていたものとして認識し、さらに「個人的なこと」、「政治的なこと」という線引きをする行為自体が恣意的で、「個人的なもの」をとるに足らないものとみなすことを問題化する姿勢が高唱されたのである (堀江; 2016)。そうした中で、私的なことを語る女たちの言説、小説や映画に表現される女たちの真実は、女の社会的状況を明らかにする重要な分析対象になった。フェミニズム文学批評⁷⁾ と呼ばれる流れの代表的研究者の一人である Hirsh (1989/1992) は、19 世紀から 1980 年代に至るまでの女性によって書かれた母と娘の物語をこうした観点から読み直し整理している。彼女は「物語の伝統の中にある女性像の変遷・変容を、精神分析理論の変遷およびフェミニズム思想の変遷と関連させて論じるもので、物言わぬイオカステが絶大な苦悩を少しずつ克服しながら徐々に、饒舌なゼイダという女像まで変容する過程を明らかにする」として『母と娘の物語』を書き起こしているが、ここで述べられているのは、エディプスという息子を夫ライオスに奪われながらも (つまり父権制の暴力に屈しながらも)、それに対して悲嘆も怒りも表せない母親としての女性イオカステが、精神分析とフェミニズムという思想的潮流に影響されながら、娘たちが自分を語り、母を語り、母親たちが自分と娘を語り、最終的には母と娘が互いに語りあう主体性を持った女ゼイダ (ブラック・フェミニズムの旗手モリソンの作品の主人公) となる変遷プロセスを跡付ける、ということである。後述するように、これは女性が女性として生きようとする発達史を跡付けようとする試みでもある。以下に彼女の所論を紹介し、それをもとにした筆者の考察を展開してみたい。

2-1-4. フェミニズム物語の展開と女性の心理的発達

まず Hirsh (1989/1992) は、「西欧文化は本来的に母親殺しの特質を負っている」という Irigaray の言説から 19 世紀女性作家が描く「女の家族物語」を読み解いている。それは母を沈黙させた父権制社会のもとでは、女が「娘に手渡ししてやれる権力も富もまったく持ってはいない…母親たちがなし得るのは、権力を持ち、経済的にも力を持つ男たちを歓ばせ、男たちに身をすり寄せるという、父権制度の中で生き延びる術を娘たちに教え込むことしかない」からである（前掲書 90）。そうした社会にあって「ものを書くことを欲し、あらゆる面で生産的かつ創造的でありたいと望むヒロインは、母親を自分から切り離し、母親の沈黙性と自分が同一視されるのを避けねばならない。」（前掲書 92）これが、母親性と作家性の両立しがたさにつながる。19 世紀小説のヒロインに母がいないのは、母親的なものを抑圧しなければ、物語を作り出すという行為自体の基盤を失うからである。実際、「一九世紀のヒロインたちにあまねく見られる母親不在は、もちろん作者自身の状況と通じている」と Hirsh は言う（前掲書 95）。

こうした母親不在のパターンは、同時代のイギリス、フランスの女性作家たちの小説にも広く浸透している、と Hirsh はいう。「まるでこの小説世界空間に『母』と『娘』が共存することは不可能で、入れ替わるしかないかのような」（前掲書 100）。このように 19 世紀の「女のリアリズム作家たちが小説内から母親像を徹底的に消し去っていること」は、「作家自身の（実在の母親に対する）敵意や恨みや失望とも、部分的にはかなり混じり合っているのではないかと Hirsh は推論している。「しかし皮肉なことに、母親たちの不在、自分自身の運命や人

生の詳細に関する母親たちの沈黙こそが、娘たちが結局は同じ人生、同じ物語を繰り返すことを動かしがたくしている」（前掲書 136）という。

次に引き続く母娘物語を彼女は、「理解してくれるかもしれない男」の出現、あるいは「兄弟愛的な筋書き」の線に沿って分析している。彼女はジェーン・オースティンの小説『エマ』や『マンスフィールド・パーク』を題材に、「権威を持った父親が占めていた位置を、養育的特性を付与された別の男—知と親の権力と支配の代替物を女にさし出す役—にとって代わらせることで、母親の欠落を補おうとさえする」女の夢物語を読み解く。そこでは、父の代わりとして、「理解してくれるかもしれない男」の庇護と性愛的ではない兄妹的な関係が描かれる。通常、こうした兄妹の筋書きでは、「兄の言説は慈愛的、共感的、包容力豊かで、何ら要求しない性質を持つ」のだが、結局は、その兄も速やかに家父長に変身してしまう。その意味で、この筋書きは Freud 流家族物語の暫定的な修正にとどまらざるを得ない、という。なぜなら Freud 的家族物語では、母親的なものの抑圧と父親的なものとの同盟が共に語られ、家族内で家父長制が維持される物語になるが、兄妹愛的筋書きでは、父の代わりに兄が選択されるも、しょせんその兄も速やかに家父長化するという意味で、家父長制維持の物語であり続けるからである。

引き続く 1920 年代の女の家族物語は、Hirsh によれば「強制的な異性愛」信仰への抵抗として特徴づけられる。つまり、娘は母親から「自立」し、「独立」して異性愛へと目覚めるべきであるという暗黙の筋書きを押しつけられているが、それに対する抵抗、母を継承する以外の可能性を探っている、というのである。この時代の物語は母娘関係を中心に創作され、「若い女性や中年女性が、創造的な仕事をするために、

恋愛と結婚を放棄すること、自己確認のために人とつながりを放棄すること」(前掲書 192)をその特徴としている。また、「母親の賞賛との独特の結びつけ方」(前掲書 193)もこの時代の女性たちの作品を特徴づけている、という。その代表者として Hirsh は『自分自身の部屋』を書いたバージニア・ウルフと『夜明け』を書いたコレットを取り上げている。

彼女らの独自性は、「女独自の文化を主張したり、ジェンダーの二分法の脱構築を主張するのではなく、(男女の)両方の道を同時に進むことによって、すなわち差異を肯定しながらも、同時にそれを解体させることによって、主体としての自己を確立しようとしている」点である。彼女らが提唱した具体的な戦略とは、「男女両性具有」と「母親たちを通して、遡って考える」行為である。それは母親との繋がりへの切望と断絶という葛藤を峻烈に意識化し抱えながら、作品を作るという行為を生きる、という筋書きである。Hirsh はその背景として「避妊の発明と改良と大規模な普及、出生率の劇的な低下、母と幼児の死亡率の大幅低下、これらすべてが一九一〇年代と一九二〇年代に起こり、女性作家たちが母親性を想定し直すことを可能にした」ことを挙げる。つまり女性作家たちは芸術家でありつつ、生死と自らの全生活を賭すことなしに母となることを想定できるようになったのである。しかしここでも依然、母についての作品は必然的に挽歌になる、という。それは「母親が死んで、はじめて娘たちは作品を書ける」からであり、「その時になってはじめて、思ひ出と願望が、結合と再構築と修復の道具としての役割を果たす」からである。そうしてウルフの場合は神話化された「恐ろしい母親」との融合と分離の強烈なアンビヴァレンスを、コレットの場合は幻想の母親の中に見出した静かな自己豊饒化への希求が描かれている、としている。

ところで Freud が自らの発達理論を修正して、娘と母親の前エディプス期の絆の重要性を認識するようになったのも、この 1920 年代であった。彼は同時代の女性研究者たち、Kline や Deutsch、Horney などの(母親としての)体験的な理論を取り入れて、どのように子どもが初期の母親への愛着を断念して異性愛に移行するかを詳細に記述した。Kline は幼児の直接観察に基づく知見から幼児期のファンタジーに基づいて Freud の見解を補強し、Horney はこの移行を(現実的に不利を被っている)「女であることからの逃亡」として社会的に動機づけられたものと見なすと同時に、母親となることの喜びを高唱するという矛盾した態度をとった。Deutsch は女の発達の過程に「母親と父親との、両性の間の揺れ動き」を取り入れた。精神分析におけるこうした修正が、「強制的な異性愛」をめぐる暗黒の筋書きに重なるもの、と Hirsh は見ている。というのも「前エディプス期の母親との親密さ、エディプス期における母親からの分離と父親への愛着、その愛着を、他の男性の愛情対象や子どもを産みたい願望に移すこと、こうしたコースに対する多くの反逆形態—女のアイデンティティの一貫性の主張や、『女であることからの逃走』など—、これら全部が、ウルフやコレットやその同時代人たちが提示した物語構造の中に、実際に入り込んで」おり、これらを通して確かに「彼女たちは、母親の物語を繰り返すことも、繰り返さないことも、両方可能」にはなる(前掲書 233)が、依然として「強制的な異性愛」の筋書きと父-母-子というエディプス的な三角関係の呪縛からは逃れられていないからである。これを取り越えるには、フェミニズムの家族物語、さらには「ポストモダニズムの筋書き」が模索されねばならない、と Hirsh は言う。

1970 年代から 80 年代の「フェミニズムの家

族物語」の特徴として、Hirsh は以下の点を挙げている。すなわち、①前エディプス期、前言語期の起源の時点に戻ろうとする力（指向性）の存在、②父親や他の男性人物を「フェミニズムの家族物語」から追い払っていること、③母娘結合の特性を、ジェンダー差異の定義の根本として観念的に意味づけていること、④ヴィジョン再構築⁸⁾ から揺れ動きに至る一連の過程を、女の筋書き作りと主体作成の構造の中に、明確に位置づけていること、である（前掲書 255）。

Hirsh はこれまで取り上げてきた Mitchell、Irigaray、Kristeva、そして Chodorow などの女性精神分析家たちの言説を概括し、次のように結論する。「精神分析的フェミニズムの著作の中で述べられているフェミニズム版家族物語は、娘の物語である。そこでは母親は、娘による同一視や拒絶の戦いを通してからみあって、娘は徐々に父親や兄弟や男の恋人との距離を広げていくのであり、娘は姉妹や女の恋人との結びつきにおいてのみ、問題のない関係が築けるとされている。…（フェミニズムの家族）物語は、母親の位置に関して、極度の動揺（アンビヴァレンス）をきたしながら展開するしかない。」（前掲書 270）つまり前エディプス期の深い母娘の結びつきに立ち戻ろうとする指向性と、そこから逃れようと葛藤する娘が主体となっている、というのである。

しかしながら、フェミニズムはここで留まっているのではない、と Hirsh はいう。1970 年代以降の「ポストモダニズムの筋書き」を語る中で、Hirsh は「精神分析理論や、精神分析学用語に過度に依拠したフェミニズムは…女の経験の非常に重要な一面—母親の声と主体性—を表すことはできない」（前掲書 314）として、「伝統の束縛を打破することは、フェミニストの娘がフェミニストの母親になり、その自己形成過程

を、さらにフェミニストである自分の娘に語り聞かせられる場合のみ実現する」と述べる。「フィクションと理論の両方で示される女の成長の物語は、娘の声のみならず、母の声でも書かれねばならない」（前掲書 316）と強調するのである。「フェミニズムの言説と母親の言説を引き裂くものの正体を突きとめる精査によって、はじめてフェミニズム思想は解放され、母親の主体性の形を定義づけ、母親の声の意見表明を研究することができるようになるだろう。このようになった場合のみ、両方とも主体である母と娘のフェミニズム家族物語—たがいの主体性を可能にする家族的、社会的コンテクストの中に生き、相互に語りあう家族物語—を構想できるようになる」（前掲書 319）と Hirsh は言う⁹⁾。

ここでさらに、「理解してくれるかもしれない男」あるいは「兄弟愛的筋書き」に対応するような形で、「姉妹愛の筋書き」について Hirsh は言及している。「1970 年代を通して、姉妹愛や友情や代理母のメタファが、女たちやフェミニストたちの人間理解にとって最重要なモデルであり続けていた。」つまり大部分が娘たちであったフェミニストたちは、対等な者どうしで支え合い、あるいはお互いに母親よりも多くの慈しみを与えてくれ、母親よりも自立性獲得の励ましを与えてくれる「代理的な母」になるという段階を措定しているのである。

しかしながら、「姉妹愛がフェミニストの人間関係のメタファー—これは学術的世界における娘としての立場のメタファの固守と結びついて—として広く浸透したために、フェミニズム理論は母親の物語や経験と切り離され、フェミニストの中にある母親的なものが抑圧されることになった」として、彼女はこれを問題視している。その根拠として、Hirsh は以下の 4 点を挙げている。①母親自分自身の中にある犠牲

者性を象徴し、「母親に対する恐怖」からその神秘化を永続させてしまう。②傷つきやすさやコントロールの欠如を母親性の特徴に帰してしまい、理性やコントロールを越えたところにある女の意識や経験を排除してしまう。③母親性と身体性、セクシュアリティの問題は強くタブー視されている。④母親的なものの権力や権威への恐怖がある（前掲書 323-324）。こうした理由のために、フェミニズム理論は母親の立場に立って、母親の声で話すことができなくなっている。「母親の経験を基盤にし、権力と無力、権威と不可視性、強さと傷つきやすさ、怒りと愛情を結びつけられる母親論を、フェミニズムが理論化でき、実践に移せた場合に…はじめて、母親は、フェミニストたちの論文の中から政治化されてくるだろう」（前掲書 327）と Hirsh は言う。

返す刀で、彼女は精神分析的なフェミニズムをも断罪する。「精神分析的な物語のこの部分は、いまなお、子どもの発達にとって母親との断絶は必要であるとか、母親は子どもに過剰に自分を与えているため、この断絶でもって荒廃してしまうとか、母子間の愛着は、母親の怒りの表現によって深く危険にさらされるとか、母親の主体性は、子どもへの反応の中にしか存在しないと、母親の主体性は、娘の主体性育成のために消されなければならないとかの想定をしている」（前掲書 334）その意味では、Kristeva も Irigaray と同類であり、「母親の物語は、たとえそれを書こうと努めてみても、母親からは始まらないし、また母親の作用や主導権や主体性を認めることもない」（前掲書 341）のである。

こうした批判から、Hirsh はさらに新しい展開、「母の声」で描かれるようになった作品に興味を示している。アリス・ウォーカーやポール・マーシャル、トニ・モリソンといった黒人

女性作家たち、いわゆるブラック・フェミニストたちは、人種差別、性差別への戦いを標榜すると共に、黒人家庭の「母権制」に挑戦している、と Hirsh はいう。「娘と私は結びついている。私たちは母と子である。しかし、私たちの自我を否定する者に対しては、私たちは本当に姉妹になる」というウォーカーの言葉を Hirsh は引用している。こうした（母と娘としての）二重性や多重性の感覚が女性としての自我確立の基盤になる、というのが Hirsh の主張である¹⁰⁾。

「精神分析的フェミニズムは、男の子として想定されていた子どもの範疇に女の子を加えたのだが、しかし大人の女の観点をそこに加えることはしていない。」（前掲書 327）大人の女の観点、すなわち「家族の外にある人種的、階級的、言語的、民族的、性差的、文化的な提携と同化に直面し、さらには文化の支配権を握っているグループと従属的なグループの衝突に直面するならば、また、このもろもろのグループの一人一人に、主体性と、象徴的なものの利用権を付与とするならば、アイデンティティと自意識に関するもっと複雑なモデルを開発しなければならない」（前掲書 379）。それが二重性や多重性を持った声で話し、個人的なことを政治的なことと結びつけ、アイデンティティと主体性を持った大人の女としての観定の創出につながる、と Hirsh は考えているようである。

しかしながらそれは未だ達成されてはいない。「フェミニストたちは、新しい理論や新しいフィクションー本質主義に陥らずに具体性を保ち、母親の矛盾する二重の立場を表現している理論やフィクションーを発明しつつあるのだと、私は確信している。」こう言明することで、実はそういった模索がまだまだ先の課題であることを示唆している¹¹⁾。

1-5. 母娘物語から見た女性の発達論—筆者の試論

ところで先述のように、母娘関係を中心に展開してきた Hirsh のこのような家族物語の展開は、それ自体女性の成長、発達、そして自立の物語としても読み解くことができるように思われる。例えば Neumann (1971/1984) は『意識の起源史』において、個人の「自己」にまつわる発達のプロセスを歴史的なテーマの変遷に基づいて展開させたし、Jung (1947/1976) も『内なる異性』において、アニマ、アニムス元型の展開を記述している。同様の形で母娘関係というテーマがフェミニズムの中で、つまりは女性の心理においてどのような変遷をたどったかを跡付けることによって、女性の心理的発達について一定の示唆を得ることができるのではないだろうか。こうした発想に立って改めて Hirsh が見出した母娘物語の筋書きを概観してみると以下のようなだろう。

①母の不在、あるいは沈黙によって、結局は母の運命を繰り返してしまう娘の筋書き。

②「理解してくれるかもしれない男」あるいは「兄妹愛的」筋書き。

Freud 的な「異性愛信仰」に対して、

③前エディプス的な「恐ろしい母親」に強烈なアンビヴァレンスを抱きつつ、「男女両性具有」の存在として母との関係を維持する筋書き。

③' 幻想の母の内に自己豊饒化のモデルを見る筋書き。

④女同士の姉妹的、代理母的関係というフェミニズムの家族物語の筋書き。

⑤女が「娘の声」と共に「母の声」でも語る母娘物語の筋書き。

これを母娘関係の展開に伴う女性の発達段階としてまとめてみると、以下のようなのではないだろうか。

(1)母のようにはない、としながらも、結局は伝統的な母親役割を引き受けてしまう段階。

(2)「理解してくれるかもしれない男」の出現によって母から距離が取れるが、やはり母親役割に陥ってしまう段階。

(3)神話化した「恐ろしい母」と「男女両性具有」の存在として戦い続ける段階。

(3)' 幻想的、自然な「母なるもの」を希求して、男に拠らない豊かな女性を生きようとする段階。

(4)男を排除し、女同士の姉妹的、代理母的結びつきに女性的な生き方が見出せると信じる段階。

(5)母となって、自らの体験とそれにまつわる感情を赤裸々に娘に語り、また娘として母と語りあい、互いに主体性を持った個人として生きる段階（未踏）。

恐らくこれは、Hirsh 自身が『母と娘の物語』の序論で述べているように、「娘の発達過程、すなわち、母親の弟子としての女の発達の研究書になるはず」であった本書が、もともと意図していた筋書きであろう。しかし彼女は、「娘としての自分にとって意味ある本を書き始めたのだが、母親としての自分にとっても意味ある本を書き終えた」と述べ、「最後に、明確には説明できないが、本書は私の母親についての本である。母について言及することで、口にするのも恐ろしい話も、聴かれ、読まれ、口に出され得るようになる」と示すことも、本書の目的の一つである」と述懐するに至っている。その意味では、取り上げられている個々の作品がすべて、各時代背景を生きる女性たちの「個人的な」母娘関係ありながら、すべからく「政治的な」母娘関係（家父長制社会において女が母として、娘として、そうして主体性を持った女としてど

う生きるか)を描き出しているとも言えよう。

また、こうしたプロセスは幼児期からの母からの自立を描いているというよりも、思春期以降の母娘分離のプロセスと見なした方が、より適切なように思われる。その意味では、大森(2002)が筆者の提唱する上記の発達段階に「原初的一体感の段階がない」とする指摘は当を射ている。乳幼児期の母親依存状態は前提として、思春期はまさに母からの分離のための「母殺し」、多くの場合、モデルにはしたくない実在の母の否定から娘の自己探求が始まるのであり、そのプロセスにおいて、「分かってくれるかもしれない男」である異性が出現したり、同級生や先輩という形で姉妹愛的関係、代理母の関係が生じてくるかもしれない。とりあえず就職はしたものの、男に伍して働くつもりが働かされ、男女両性具有ならぬ男根的女性と化して消耗したり、いつまでもなくなならない男女格差に早々に見切りをつけて、自分探しという名目で自己豊饒化に向けて旅をしてみたり、新たな資格にチャレンジしてみたりする段階が来るかもしれない。そうこうするうち、個々に独立し、主体性を持った女たち(母と娘)が出会い、そこで改めてお互いの真実を語りあい、認め合うプロセスが展開する。ひょっとするとそれは、娘が妊娠、出産して母となった時かもしれないし、ことによると母が高齢化して介護される側、世話される側となり実質的に娘へと退行した際に、かつての娘が母として世話する側に回った時かも知れない¹²⁾。さらにこの順序が、入れ替わることも多々起こるだろう。こうした点については、改めて述べてみたい。

それにしても、当然と言えば当然かもしれないが、個々の母娘物語において、男の果たす役割は、きわめて乏しい印象はぬぐえない。デーメテル神話において母娘の融合に楔を入れる役割を果たす強姦者ハーデス、「分かってくれ

るかもしれない男」として娘に母からの分離を促しながら、やがては家父長制における父、あるいは息子となって娘を母に仕立て上げる宰相の君、不要であると宣告され、あるいは誰でもいい「他者」として、母と娘の欲望で消費されるコレットの描く男たち…母娘物語の中で男たちはそうした役割しか与えられていないように思える。母娘物語における男女共同参画は、いま少し後の課題として、とりあえずジュディス・バトラーが出現するまでのフェミニズム心理学の展開をもとにした、母娘関係の臨床心理学的検討はここまでにしたい。

注

- 1) Jung は「両性具有」を表す言葉として、未分化な状態にある「ヘルマプロディーツス」と、高次の段階に変容した「アンドロギノス」を区別して用いているという(山中;1993)。
- 2) 6版までは、「女性の社会的・政治的・法律的・性的な自己決定権を主張し、男性支配的な文明と社会を批判し組み替えようとする思想・運動。女性解放思想。女権拡張論」とされていたが、市民団体などからの批判にこたえる形で2017年7版において「平等」の文言を含む表現に書き換えられた。ただし、批判の多かった「女権拡張論」の文言についての修正はなされなかった。
- 3) Kline は最早期の超自我形成の先駆として、つまり母子関係における母親の全能性の根拠として「結合両親像」を想定しており、一方で Lacan は最早期のそれをファリック・マザーとして理論化した経緯がある。
- 4) 西欧文明との対比の上で、日本の状況について Kristeva (1991) は「日本的<パロックス>」で興味深い問題提起をしているが、この点については別稿において改めて取り上げたい。
- 5) これは「プロチョイス」あるいは「プロライト」の問題として、改めて論じたい。
- 6) Chodorow は「あとがき」の中で、「一九七四年には、一八歳以下の子どもを持つ母親の四六%が働いている。内訳は、学齢期に達した子どもの母親の半分以上、六歳以下の子どもの母親の三分の一以上である」と報告している。一方で

我が国の厚生労働省による2019年「国民生活基礎調査」では、末子が学童期の子どもの母親の70.6%が就労しており、24.7%が正規雇用されている。また6歳以下の子どもの母親の27.8%が働いている。非正規が多いとはいえ、ワーキングマザーの割合は、Chodorowの時代の米国よりはるかに高い数値を示している。

- 7) これはガイノクリティシズム（エレイン・ショウォルター）と呼ばれる領域でもある。（小林：1997）
- 8) ここでいうヴィジョン再構築とは、リヴィジョン（改訂）を意味する。すなわち、「これまで知ってきたのとは違う形で」見直す作業を意味している。
- 9) Hirshのこうした主張の背景として、ラディカル・フェミニズム、エコロジカル・フェミニズム、マルクス主義フェミニズム、ブラック・フェミニズム、グローバル・フェミニズムなど、フェミニズム運動や思想の多様化と内部での論争が高まったこと、さらにはバックラッシュ（揺り戻し、反動）の勃興という新たな動きが起こってきたことが挙げられよう。この点についてはまた改めて論じてみたい。
- 10) 「精神分析が常に犯す過ちの一つは、すべてを家族というパラダイムに還元してしまうということ」という先述のGallopの批判を真摯に受け止めるなら、「姉妹愛」や「代理母」のファンタジーや「二重の声で語る母」でさえ、その軛を免れてはいないと言えるかもしれない。しかし少なくともジェンダー差別、人種差別、セクシュアリティ差別などへの社会的活動や政治的活動のための連帯を視野に入れたフェミニズムの家族物語は、人間の苦しみを「神話化」し、個人的な「人格」の問題として取り扱う社会的関連の感覚を欠いた心理学が提唱する筋書き（精神分析的家族物語）とは、大きく異なっていると云わざるを得ない。
- 11) Hirshのこうした著作に相前後して、1990年代以降アメリカではブッシュ政権の成立と共に、フェミニズムはバックラッシュの嵐にのみ込まれ沈滞化を余儀なくされた。我が国でも「男女雇用機会均等法」、「男女共同参画社会基本法」、あるいはセクハラやDVの規制といった動きにもかかわらず、バックラッシュによって「1998年ごろから2007年ごろの10年間は、日本の女

性学において『失われた10年』ともいえるくらい、大きくジェンダー平等が後退したままとどまってしまった」（石：2014）とされている。

- 12) もちろんこう書いたからと言って、娘による家族介護を必然的なプロセスと見なしている訳ではないことは言うまでもない。性別役割分業にとらわれない子育てと同じように、男女共同参画による介護は今後も進んでいくだろうし、何よりも「家族」という形態をア・プリオリに養育と介護のシステムと見なすこと自体、すでに現状で無理がある。保育園や幼稚園、グループホームからケアホーム、多様化し分業化されるこうしたシステムを利用し、生きることを前提とした生涯発達、キャリア構築のモデル作りが、これからの喫緊の課題であろう。

<文献>

- ・ Beauvoir, S. (1949/1997) *The Second Sex*. 井上たか子・木村信子監訳『第二の性 I 事実と神話』新潮社
- ・ Chodorow, J. N., (1978/1981) *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*. 大塚光子・大内菅子共訳『母親業の再生産』新曜社
- ・ Gallop, J. (1982) *Feminism and Psychoanalysis: The Daughter's Seduction* (Language, Discourse, Society. Palgrave Macmillan. 渡部桃子訳『娘の誘惑 フェミニズムと精神分析勁草書房
- ・ Hirsh, M. (1989/1992) *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism*. Indiana University Press. 寺沢みづほ訳『母と娘の物語』紀伊国屋書店
- ・ 堀江有里 (2016) 「『個人的なことは政治的なこと』をめぐる断章」立命館大学生存学研究センター報告 24号、124-152
- ・ Horney, K. (1982) 『ホーナイ全集第1巻 女性の心理』安田一郎・我妻洋・佐々木譲訳 (1982) 誠信書房
- ・ ホーン川嶋瑤子 (2000) 「フェミニズム理論の現在」『ジェンダー研究』第3号 (お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報 通巻20号)
- ・ Irigaray, L. (1977/1987) *Ce sexe qui nous dépasse*. 棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子訳『ひとつではない女の性』勁草書房

- ・ Jung,E. (1947)『内なる異性』笠原嘉・吉本千鶴
子訳 (1976) 海鳴社
- ・ 小林富久子 (1997)「フェミニズム文学批評」江原
由美子・金井叔子編『フェミニズム』新曜社
- ・ Kristeva,J., (1991)『女の時間』棚沢直子・天野
千穂子編訳、勁草書房
- ・ Mitchell,J. (1974/1977) *Psychoanalysis and
Feminism: Freud, Reich, Laing, and Women.*
New York: Pantheon Books. 上田晃訳、『精神分
析と女の解放』合同出版
- ・ 水田宗子・北田幸恵・長谷川啓編著 (1996)『母と
娘のフェミニズム 近代家族を超えて』田畑書
店
- ・ Neumann,E. (1971)『意識の起源史』林道義訳
(1984) 紀伊国屋書店
- ・ 信田さよ子 (2017)『母・娘・祖母が共存するた
め』朝日新聞出版
- ・ 大森亜紀子 (2002)「母娘関係における一体感と分
離について」京都大学大学院研究科紀要 (48)、
262-270
- ・ 石橋 (2014)「日本女性政策の変化と「ジェンダー・
バックラッシュ」に関する歴史的 research」
- ・ 山中康裕 (1993)「両性具有」濱野清志・垂谷茂弘
訳『ユング心理学辞典』創元社
- ・ 棚沢直子 (1996)「シンポジウム「母性を問うー〈母
と娘〉という主題」」(水田宗子・北田幸恵・長
谷川啓編著 (1996)『母と娘のフェミニズム 近
代家族を超えて』田畑書店)
- ・ Wright,,E 編 (1992/2002) *Feminism and
Psychoanalysis: A Critical Dictionary.* Wiley-
Blackwell. 岡崎宏樹・樫村愛子・中野昌宏 (訳
者代表)『フェミニズムと精神分析事典』多賀出
版

Abstract

The Evolution of the Research of Mother-Daughter Relationships II: From the Viewpoint of Feminist Psychology

Koichi TAKAISHI

This article focuses on the criticism against the Freud's patriarchal psychoanalysis from the feminist psychoanalysts, such as Deutsch, Horney, Mitchell, Gallop, Chodrow, Irigaray, Kristeva and so on. Referring to Hirsh's literature study from the feminist standpoint, the hypothesis of female consciousness development is proposed.

Key words : mother-daughter relationships, feminist, female consciousness development